

---

# 困われ姫

星菜 琉衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

困われ姫

### 【Nコード】

N7179D

### 【作者名】

星菜 琉衣

### 【あらすじ】

三園羽莉15歳。容姿も普通、頭も普通、運動神経もそこそこの平凡な女子高生。目立つことなく高校生活を送っていたはずなのに、あることをキッカケに全校の女子から様付けされる、学校一のイケメン二人と急接近。羽莉の平凡な生活が180度変わってしまった！！「仲良くしよーぜ！！」「ふっ、ふざけんなああ！！！！」「あたしがなにしたってっていうのよ！！」もうこんなの嫌あああ（泣）！！

## 第1話 出会い

みそのつり  
三園羽莉です。高校一年生。彼氏は、無し。ホントは欲しいんだけど、なかなかできない。

あ、いきなりこんな自己紹介すみません。ここからはナレーターでどうぞ。

「ねえ、美雪。」

「ん？」

隣で購買で買ったパンを抱えながら携帯をいじる羽莉の親友、高山たかや美雪まみゆきに呟くように不満をぶちまけた。

「彼氏欲しい。」

「はあ？なにいきなり。」

「だって高校入ってもう一ヶ月。男子にもなじめて、もうそろそろ告白されてもいいころ。なのに、高校生活最初の夏休みを一人で過ごすなんて寂しすぎるじゃんそうだよね!？」

「なあに興奮してんのあんたは。」

バシッ

最後に力んだ羽莉に美雪はいつも通りクールにつっこんだ。

「痛い!うゝ、だってえ。いいなあ、美雪は。綺麗だからモテるでしょ?」

「そんなことないよ。」

「まあ、美雪は彼氏一筋だもんねえ。」

「まあね〜。…あ、『凜』だ。」

「え?」

うざったそうに目を細めた美雪の視線に羽莉も向く。案の定、もっとも苦手な二人組がこちら方面へ歩いてきたからだ。

「キヤーツ!! 『凜』よお!」

「かつこいい〜!」

「陵夜様〜!!」

「水樹様こつち向いて〜!!」

その光景に思わず眉間に皺を寄せた。たくさんの女子に囲まれアイドルのように騒がれる男子生徒二人。目も眩むような眩しいオーラに、羽莉はちよつと腰が引けた。

「相変わらずすぎ。苦手だわ〜、あの二人。」

「あたしも苦手。でも美雪には彼氏がいるもんね〜。」

「しつこいわ!」

「アハハッ。」

羽莉はなにも気にせずその二人とすれ違った。その時、たくさんいた中の女子の足に引っかけってしまったのだ。

ガッ

「っ、キャッ」

「え?」

うわっ!

咄嗟に側にいた誰かの服を掴むが、その人物も引き込むようにその場に盛大に転んでしまったのだ。背中に痛みが走ると同時に、身体にのし掛かる体重。せっけんのいい香りが鼻を掠める。

「羽莉ッ、」

「いったあ〜…。」

……ん?

「いつてえ…。」

目を開けると綺麗な顔がすぐ目の前にあった。あまりの近さに顔を赤く染める。

こいつ、名城水樹!?

「わわわっ、ごっ、ごめんなさい!」

ムニツ

…“ムニツ”?

「おうっと、乳もみハプニング!」

周りの男子が騒ぐ。羽莉の胸には大きな綺麗な手が触れていた。

“

水樹”はそれを見て眉を顰める。  
なっ…!!?

焦ってどかさうとするが、咳くような相手の第一声に、その動きはピタリと止まった。

「…小さい。」  
「…っ  
かあ…っ

その言葉に頭に血が昇った羽莉は、これ以上無いほど顔を真っ赤にした。

「…ふっ、ふざけんなああ…!!」  
「…っ  
パンツ

静寂に包まれた廊下に乾いた音だけが響き渡った。

「アハハハ!!」

「もう、最悪。」

「もう羽莉最高!お腹痛い〜!!」

「そんな笑わなくてもいいでしょ!?!?てゆうか、あたしBはあるわよ失礼な!」

「しかも、あの名城水樹を殴るなんて!マジスキリしたわ〜!」  
「もう。」

涙目で笑い転げる美雪に羽莉は顔を赤くし頬を膨らませた。

「でも、あの『凜』の一人殴っちゃって、女子からの視線痛いよ〜?」

「うっ、そうだった。」

その言葉がグサリと胸に突き刺さる。同時に聞こえてくる女子の声。

「あいつでしょ?水樹様殴ったの。」

「ああ、三園羽莉ってやつ。」  
「マジ最悪なただけ。」

トホホ…。

『凜』とは、あたし達と同じ一年生で、二人ともものすごくかつ

こいいー！水野陵夜みずのりょうやの方は、運動神経抜群、しかもこの女子生徒ほとんどに手をだしているという超遊び人。ピアスつけて、茶髪のロン毛。女教師にも手をだしているという。だから陵夜の方は超苦手。

名城水樹なしろみずきの方は、超クールで陵夜と反対に、女嫌い。こちららも運動神経抜群。とりあえず、成績優秀。有り得ない程完璧人間。

そして、その名城水樹に乳を揉まれ、挙げ句の果てには『小さい。』と…小さくて悪かったな！！

そして、言うまでもなく、二人はモテる！だから、面倒くさい女子のトラブルに巻き込まれたくないから、近寄らなかつたのに…、結局こうかよ…。段々大きくなる悪口もうざりたい。

「ねえ、っーか可愛くないじゃん。」  
「超うざい。」

さすがに苛つき、羽莉は一言なんか言ってやろうと立ち上がった。

「ちよつとあんたらさあ…。」  
ガラツ

だがそれは教室の戸が開く音と間抜けた声に掻き消された。

「は〜い、みなさん。」

水野陵夜が名城水樹の肩を掴みながら満面の笑みで手を振っていた。一気に教室が悲鳴に近い女子の声に埋め尽くされる。

「キヤーツ！！！！」

「なんで『凜』の二人がうちのクラスに！？」

「や〜ん、かつこいい〜！！」

「…うるさ。だからやだつたんだよ。」

「まあまあっ」

水樹が耳を塞ぎながら不機嫌そうに顔を歪める。

な、なんでこの二人がうちのクラスに！？

「あのさあ、三園羽莉ちゃんってこのクラス？」

その言葉にみんながシーンとする。そしてキツと女子が羽莉を睨みつけた。それにびびりながらも手を挙げた。

「あ、あの、」

「ん？なに？」

「三園は私ですけど…。」

「…ああ、君君！ちよつといい？」

「えっ？ちよつ、」

「じゃあ、おじゃましました。」

「り、陵夜様！？」

強引に羽莉の腕を引き教室を出て行った。羽莉は状況が理解出来ず口をパクパクさせるだけだった。

なっ、なんなの！？

屋上に連れて来られようやく手を離してもらった羽莉は落ち着かない様子で話しかけた。

「あ、あの、なんの用…でしょうか…。」

「…ぶっ…。」

はっ？

「アハハハハ！！君最高！超ウケる！！」

「陵笑いすぎ。」

「だってよお…ッ」

涙目になり美雪みたいに大爆笑する陵夜に呆然とする羽莉。

「俺達さ、君の事超気に入った。これから仲良くしようぜ！」

陵夜の手が羽莉の髪をぐしゃつと撫でる。大きな手に肩が跳ねた。

「はっ、はあ！？なんでそんな方向…ッ！？」

「俺は水野陵夜！一年C組！よろしくな！」

「し、知ってるけど！つか話を…っ！」

流されてる羽莉に今度は水樹が頭に手を置いた。

「名城水樹、一年C組。よろしく。」

「あ、はい。…じゃなくて！聞いてますかあんたらッ！」

「メアド交換しよーッ」

「だから話をッ、」

聞けよおお！！

だがやはり流されてしまった羽莉は陵夜と水樹とメアド交換してしまっただった。

## 第2話 二人との急接近

「なんなのよこの展開は。」

眉間に皺を寄せ羽莉は溜め息をつき頼杖をついた。

「すっごいじゃん！あの『凜』の二人に気に入られるなんて！」

「よくないよ！ただでさえ苦手なのに気に入られちゃってさあ。どうしよあ…。」

ギョルルツ…

突然、羽莉のお腹から盛大に聞こえる音。羽莉は赤くなり手で押さえた。

「あ、え？」

「…食べよっか。」

「う、うん。」

微笑して美雪がパンの袋を開けた。羽莉も机の上のパンを手にとった。が、

ガラツ

「三園、飯行こ。」

その怠そうな声に羽莉は反射的にパンを再び机の上に落としてしまった。

「なっ、名城君…ッ？」

サアアと顔の血の気が引く。バツと周りを見回すと、怒りに震える女子の姿。

「水樹様！？一体どういう事ですか！？」

「うるさい。三園、早く。」

「は！？や、やだ！あたし美雪と食べるもん！ね、みゆ…」

美雪に助けを求めると、なぜか美雪は満面の笑みで羽莉の肩を掴んでいて。

「み、美雪？」

「どうぞ、煮るなり焼くなり好きにしてください。」

「はあ!？」

美雪の力はすごいもので、簡単に入り口にいる水樹に引き渡された。

「そうさせてもらう。」

「へっ!？」

ガシツと羽莉の腕を掴み、早々と歩き始めた。

「ちよっ!美雪!」

美雪はしてやったりというような笑顔をつくり親指を立てた。

「うっ、裏切り者おゝ!!」

泣きそうな顔で羽莉は引きずられるように連れて行かれた。

「ちよっ、痛いって!はなしっ…!!」

「陵。」

「あ、ちゃんと連れてきたか。」

芝生に寝転がっていた陵夜は二人を見て起き上がる。

「陵が連れてくればいいのに。あの女達うざい。」

「…あの、ここは?」  
「サアツ…」

気持ちいい風。大きな木の下で、人目みつかない静かな場所。太陽の光が、葉の隙間から差し込んでいる。

「いい…場所だね。」

「だろ?ここなら、誰にも邪魔されない。」

「…三園なら好きな時に来ていいって陵が。」

「え…。」

「…こないいい場所…この学校にあったんだ…。」

「さっ、お昼食べましょ。」

「う、うん。」

陵夜に場所を空けられストーンと座る羽莉。

「…ん?」

「じ、じゃなくて!?!」

「ん?なに?」

危うく流されるところだった…!!

「なに?じゃなくて、なんであたしがあなた達とお昼しなきゃいけないわけ!?」

「へ?」

もう陵夜は焼きそばパンを頬張っていて、水樹はパツクのコーヒをズズツと音をたて飲みながらキョトンとこちらに視線を向けた。

「い、いきなり仲良くしようとか意味分らないし、第一、あたしじゃなくてもあなた達と食べたいって人は山ほどいるんだから、そっちいけばいいじゃん!」

「それが嫌だからこうして…。」

「あつ、あたしは道具じゃない!!」

このケロツとしたところがむかつく…!!

「あつ、あなた達のせいで女子の視線やばいんだからね!?その辺もうちよつと考えて…!!」

「ふうん。」

二人の態度にいい加減頭にきた羽莉は怒りに震え立ち上がった。

「人の話を聞け!!あたしはあんた達が嫌いなもの!!分かる!?

女の子みんながあんたらに惚れてるとか思ってたんなツ!!」

その怒号に二人はポカーンと口を開け羽莉を見上げていた。

ああもう!苛つく!!

「それが分かったならもう話しかけてこないで!!さようなら!!」  
言いたいだけ言ってプイツと背を向けて小走りした。

「羽莉ちゃん?…行っちゃった。」

「すげえなああの女。あそこまで気の強い女初めて見たよ。」

「俺も。…たまには雑食もいいかもねえ。」

陵夜はニヤリと笑って舌なめずりした。水樹はそれを見てふうと溜め息。

「また悪い癖が始まったよ…。」

「ない!ない!ないないない!」

机の中や鞆の中をゴソゴソと探りパンツと机を叩いた。

「なにが？」

「けっ、携帯がない!!!」

「はあ？」

青ざめる羽莉に美雪は面倒くさそうに目を細めた。

「あんたのことだからトイレにでも忘れたんじゃないの？」

「お昼まではあったのに……っ」

「鳴らしてみる？」

「う、うん……」

携帯を取り出す美雪に羽莉に頭を抱えた。

「……あっ!!!」

「わっ、なに？どした？」

羽莉の大声に驚き美雪は携帯を落としそうになった。

「思い出した!!!ちよっと取ってくるね!ちよっと待ってて!」

「はいはい。」

溜め息をつく美雪に謝り羽莉は教室を飛び出し廊下を走った。

今日のお昼の場所に忘れたんだ!!!もう最悪!あの二人に拾われて

たら……!

階段を駆け下り、裏口への戸を開ける。校内に入り込んだ風が頬を

撫でた。今日いた大きな木の下に目をやると。

「……あれっ？」

腕と足を組み寝転がる人物。おずおずと近寄ると、その人物に眉を

寄せた。

「こいつ……。」

水樹がスヤスヤと寝息をたて眠っていた。白い透き通るような肌に

微かに陽が当たり、黒い無造作に伸びた髪は風に揺れている。その

寝顔に羽莉はピタリと立ち止まった。

「……悔しいけど……かっこいいな畜生。」

近くに寄り顔を真上から覗き込む。

そっぴいえば……よく顔見たことなかったかも。

太すぎず細すぎない形の整った眉に、縁取るように生えた長い睫毛、スラリとした鼻筋。どっちかと言うと女の子のような“綺麗”かもしれない。

「…あつ、」

水樹の組んだ腕の上には身の覚えのあるストラップがついたオレンジの携帯。

「あたしの携帯…っ」

起きる前に立ち去ろうと、起こさぬ様に歩みを進め、そっと携帯を手に取った。

よしっ。

心の中で小さくガッツポーズを取り、起きていないことを確認してその場を離れた。

ふふっ、ミツシヨンクリア！

振り返り勝ち誇ったように笑みを浮かべると、前を見てなかったせいか足がもつれ体が傾く。

「ふわっ…!？」

宙に浮くような感覚。気づいた時にはガシャーンと大きな音をたて豪快にひっくり返っていた。

「…ん…？」

水樹はその物音に目を開け、欠伸をしながら起き上がり頭を掻いた。  
「…なにしてんの？あんだ。」

羽莉の格好に目を細める水樹。羽莉は恥ずかしくて顔を赤く染め地面に伏せた。

あたしって…本ツ当ドジ…（泣）

「ねえ、聞いている？」

「きつ、聞いている！転んだだけ！」

ガバツと起き上がり制服を叩き立ち上がった。膝や手についた土も払う。

「なんでここにいるの？」

「けっ、携帯忘れたから取りに来たの！」

「携帯？…ああ、やっぱりその携帯あんなのだったのか。」

羽莉の手の中にある携帯を指差しまだ虚ろな目を擦る。

「結構ドジだったりする？」

「ほっ、ほっとけ！！」

ああもう！恥ずかしいんだけど！

「あっ、あのナルシストは？」

「ぶはっ、ナルシスト…」

その言葉に軽く吹き出す水樹。口を押さえ小さく笑った。

「あいつなら女のところ。戻ってくるまで昼寝。」

「…ふうん…」

自分で聞いておいて興味なさげに返事をする羽莉。

「あんたさあ、」

「な、なによ。」

「思ったことよくハッキリ言うよなあ。」

面白いモノを見るように目を細め笑う水樹に、羽莉の心臓が小さく跳ねる。

「ど、どういう意味？」

「俺らあんなこと言われたの初めてなんだよ。教師とかも俺らがやることに口出さないし、女子なんか犬みたいに言うこと聞いてよ、」  
伸びをして立ち上がると、

「なんかああいうの新鮮だなーって。」

また目を細め笑った。

…意外と…よく喋るな。もっと無口だと思った。

「笑えるんだ？」

「…は？」

真面目な顔をして聞く羽莉に水樹はまたいつもの表情に戻り首を傾げる。

「いつつも不機嫌そうにぶすーっとした顔してるじゃない。」

「…別にそんなことないけど。」

「そんなことある。ファン減っちゃうよ。」

「…どうでもいいし。」

…あれ？なんかあたし、結構普通に話してない？  
ふとそのことに気づく。

「じっ、じゃああたし帰るから！」

そう言っつて戸に手をかけた。すると水樹は思い出したようにポンと手を叩く。

「ねえ。」

「な、なに？」

眉を寄せて振り返る。意味ありげに笑いスカートを指差す。

「スカートがなに？」

「今時ウサギ柄とか履いてる女、いるんだね。」

「…ウサギ柄？」

その言葉に首を傾げる。すると、なんのことも意味が分かり、バツとスカートを押さえ顔を真っ赤に染めた。恥ずかしさに声を震わせる。

「みつ、見たつ、のっ…!？」

「パンツまでガキなんだ？」

「っ…!！」

恥ずかしさに耐えられなくなった羽莉は勢いよく戸を開け、

「最低ッ!!!死ね!!」

と叫んで急いで階段を駆け上っていった。水樹は腹を抱え笑い出し、

「おもしろー女…ッ」

と呟いた。

### 第3話 厄日

「最悪最悪最悪最悪…。」

暗示のようにぶつぶつとその言葉を繰り返す。

「羽莉、顔やばい。マジ怖いんだけど。」

棒付きキャンディーを口に入れながら目を細める美雪。

「最悪なの、死んじゃえばいいんだ、名城水樹なんて死んじゃえばいいんだ。」

「昨日なにかあったわけ？」

「……。」

パンツの柄からかわれたとか言えないんだけど…（汗）

「とにかくむかつくの！！」

「あーはいはい。」

パンツと机を叩く羽莉に面倒くさそうに手で払う仕草をする。

そこで肩を叩かれた。眉を寄せたまま振り返ると、クラスのリーダー的な存在の松村絵実まつむらえみが女子を引き連れて立っていた。

「なにか用…？」

「ちょっと話あるんだけど、いい？」

「話…？」

「羽莉に話があるんならうちも行くけど。」

いつも通り涼しい顔をして美雪が腕を組み立ち上がる。

「はあ？美雪は関係ねえだろ。」

「うちらは三園に話があるって言ってんだよ。」

「集団でなにをするつもりだよ。」

「み、美雪、いいよ。」

羽莉はその険悪な空気を収めようと慌てて立ち上がる。

「あたし行くよ。」

「ち、ちょっと羽莉、あんた状況分かってんの？」

「？、話するだけだから平気だって。」

「羽莉ッ、」

「うつせーよ美雪。」

「行くよ。」

「はいはい。」

止めようとする美雪に「大丈夫だよ」と言っつて絵実達のあとに着いて行った。

「あのバカ…」

舌打ちをして美雪はその後ろ姿を見て溜め息をついた。

「マジ、なんなワケ？」

「…はい？」

屋上への階段の踊り場へ連れてこられ、絵実の第一声がこれだった。羽莉は首を傾げ眉を顰める。

「あの、あたし松村さんになにかしたっけ？」

「とぼけてんじゃねえよ！！マジむかつくんだけど！！」

「なんで陵夜様達があんたなんかと！！」

「…はあ…？」

うわ、なんか遂に来ちゃったよこついうの。

はあ、と溜め息をついて絵実達を見直す

「あの、あたしあの人達と関わるつもり更々ないんで、どうぞお好きに…。」

「お好きにじゃねえんだよ！！」

「絵実はねえ、中学の頃から水樹様が好きなんだよ！！」

「てめえみたいな奴に捕られて頭きてんだよ！」

「と、捕るって、だからあたしはあの人達と仲良くしようなんて思ったこともないし、逆に近づきたくない程なの！だったらあんた達があのナルシスト達に直接言えば…。」

「はあ！？なにこいつ！てめえふざけてんじゃねえよドブス！！」

その言葉に羽莉の片眉がピクリと上がる。

ドブスって…。

その言葉に、短気な私は爆発。

「そんなこと言うヒマあんならあのナルクソ野郎共のどこ行けっ  
のッ」

「はあ!？」

腕を組み顔を引きつらせながらそう言い放った。

「あんた何様のつも「何様でもないっーの!その濃い化粧落とし  
てから言え山姥やまんば!！」

その言葉に、顔を真っ赤にさせ見事にキレた女達。

「誰が山姥だてめえ!!!」

「確かにあんた達より可愛くないけど、そんなことうだうだ言っ  
てんだったら好かれる努力しやがれ!!!」

「自分が好かれてるからってなに調子のとってんだよ!!!」

「そんなこと頼んだ覚えない!!!」

声を張り上げた羽莉に少し怖じ気づく絵実達。

「だったらもう金輪際関わんじゃねえよ!!!」

「分かってるよ!そのパンダみたいな目でさっさと媚びってる!  
完ッ全にキレた絵実は羽莉に平手を振り上げた。

パァンッ

濁いた音が踊り場に響く。同時に、頬に痛みが走った。

「いった」

「ふっざけやがってッ…これから覚悟しろよ!？」

「学校来れなくしてやるからな!!!」

そう言っつてバタバタと去って行った。羽莉はジンジン痛む頬を押さ  
えながら呆然とする。

…なんで、あたしばっかりこんな目に遭うの…。

そのまま屋上に駆け上がり、ドアを勢いよく開け息を吸った。

「ふっざけんなあああッ！！！！」

グラウンドに向かって思いっきり叫んだ。ふう、と大きく肩で息をし、怒りに震えながらドアをまた勢いよく閉め階段を下りていった。

「…デケエ声…」

コンクリートの上で昼寝していた水樹は耳を塞ぎながら目を細め起き上がった。

「うわ、羽莉！」

「……。」

真っ赤になった羽莉の頬を見て目を見開く美雪。

「松村にやられた!？」

「…最悪…」

怒りに震え拳を握り締める。

「全部あいつらのせいだ！あいつらのせいでえ！」

「お、落ち着け落ち着け。」

今までにないような怒り様に、美雪は少し怖じ気づき宥めるような仕草をする。

「だからあたしも行くって言ったのに…」

「だってえ…ッ」

「もう周りは敵だらけだねえ…」

「そっ、そんなあ…ッ」

「平気平気！あなたにはあたしがいるじゃん？」

美雪は羽莉の頭を撫でクールに笑った。

「心配すんなって。」

「…美雪い…ッ」

羽莉はうる、っと目に涙を浮かべ美雪に抱き付いた。

「美雪愛してるう!!」

「あー悪いけど一番は彼氏だから(笑)」

「ええッ!?!」

「うそうそっ、羽莉が一番だよっ」

美雪はそう言っつて羽莉に笑いかけた。

私はこのあとの悲劇をまだ想像してなかった…。

神様、そんなに私がお嫌いですかああ!!?!?

## 第4話 決意

「ふあっ…」

「うわ、ちよつと羽莉顔やばいから。口くらいおさえなよ。」

「おっと。」

美雪に目を細められ羽莉は両手で口をおさえた。

昨日の出来事のせいで、なかなか寝付くことが出来なかったのだ。

「うゝ、学校行きたくないなあ。松村さんと同じクラスだし…。」

「そんな気にならないうつて。…まあ…なるべく一人にならない方がいいとは思っよ。」

「えっ、なにそれどういう意味!? やだ怖いよ…。」

「大丈夫大丈夫、なるべく羽莉から離れようにするからさ。」

「あ、ありがと美雪い…。」

『学校来れなくしてやるからな!!』

羽莉は昨日のあの言葉を思い出し頭を悩ませた。

学校来れなくする…って…あたし一体なにされるんだろ…?

「…あ。」

「へ?」

下駄箱に近づいて来れば、美雪が立ち止まった。

羽莉も立ち止まり下駄箱を見れば、絵実達が自分のクラスの下駄箱の前に集まっていた。

絵実も羽莉達に気づき、睨んできた。

その間に険悪な雰囲気立ち込めた。羽莉はいたたまれなくなり、ふいと視線を逸らした。

「…なに見てんだよ。」

「…別に。」

睨んでくる絵実に対し、美雪も睨み返しそう答える。絵実はその様

子に舌打ちをし、靴箱を思い切り蹴った。

「行くぞ。」

率いている女子達にそう告げ、そろそろと去って行った。

「なんだあれ。感じ悪。行こう。」

「う、うん。」

…あたしの靴箱の前でなにしてたんだろ…？

絵実達の後ろ姿を見ながら、羽莉は自分の靴箱を開けた。

「…っ…！！！」

羽莉は思わず鞆を落としてしまった。靴箱の中の自分の上履きの上で、芋虫やムカデなどの大量の虫がもぞもぞと不気味に動いていた。

「ん？どした？」

「きっ、きゃあ…！！！」

パンツと後ろの靴箱に背中を貼り付けた。羽莉の表情に美雪は羽莉の靴箱を覗いた。

「っ…！！なっ、なにコレ…！！！」

美雪も絶句した。気味悪く動く虫たちに羽莉は吐き気がこみ上げ、口を手で押さえその場に座り込んでしまった。

「羽莉っ、」

「だ、大丈夫…。」

「先生呼びにいこ！上履きも借りなきゃ…。」

「ご、ごめ…腰抜けちゃって…さ、先行ってて…。」

「わ、分かった！」

美雪は羽莉の靴箱を閉め、急いで階段を上っていった。

羽莉は震えながら動けないでいた。

…きつと…松村さん達がやったんだ…。

頭に先程睨んできた絵実達が浮かんだ。同時に、虫たちの動きも思い出しぶるつと震えた。

「うえ…。」

「あり？羽莉ちゃん？」

「っ…！！！」

バツと顔を上げると、たった今登校してきたらしい陵夜と水樹が立っていた。

「おはよ〜っ！どしたの？こんなところに座り込んでるじゃって。」

「…具合でも、悪いの？」

「べっ、別につ…あ、あんた達には関係ないっ…！！」

「?…マジ、どうした？震えてる…。」

陵夜が俯き震える羽莉の肩に手を置いた。

すると、羽莉は咄嗟にその手を思い切り振り払っていた。

「触らないでよ…！！」

「……………」

涙が滲んだ瞳に、二人は驚いて思わず固まった。

羽莉はバツとし目を泳がせると、鞆を拾いなんとか立ち上がった。

「もっ、もう話し掛けないでって言ったでしょ!？」

「う、羽莉ちゃん!」

羽莉はバツと背を向け階段を駆け上っていった。

その場に残された陵夜と水樹は顔を見合わせた。

「泣き、そう…だったよな？」

「…うん。」

「えっ、お、俺に触られたのそんなに嫌だったのかな!？」

「…さあ…なにかあつたんじゃない？」

「なにか、って？」

「…知らないけど…。」

そこで水樹は、昨日の屋上での羽莉を思い出した。

「絶対松村達に決まってるって…！！」

「…やっ…ぱし…?」

「くっそ〜悔しい!やる事が汚いんだよあいつら…!!」

美雪はトイレの洗面台にパンツと手をついた。

「先生だっただだのイタズラだなんて真面目に聞いてくれなかったしさ!羽莉!あんたがちゃんと先生に説明しなよ…!!」

「い、いいよ、そんな大事にしたくなし…。」

「十分大事じゃない!!」

「と、とりあえず落ち着いて美雪…。心配してくれてありがとね、あたしは平気だから…。」

「羽莉…。」

「ほら、早く教室戻ろ?」

「…う、うん…。」

納得しないというような顔で渋々頷いた美雪に苦笑して、トイレから出る。

「あ。」

「ツ…!!」

丁度羽莉がトイレから出たところで、水樹が通りかかった。

羽莉の顔が一気に強張る。

「あー!!ちよつと名城!!」

「みつ、美雪っ…!!」

「?」

水樹に殴りかかりそうな勢いで美雪が服を掴めば、水樹は首を傾げた。

羽莉は慌てて美雪を止めようと腕を掴む。

「あんた達一体どういうつもり!?羽莉こんな目に合わせて!!」

「美雪!!本当にいいから!!」

「どういう事…?」

美雪の言葉に眉を寄せる水樹。

水樹に知られたくなかった羽莉は本気で焦り始めた。

「あんた達のせいで羽莉が取り巻き達に嫌がらせされて大変なんだからね!？」

「嫌がらせ…?」

「そんなことされてない!!」

羽莉は声を荒げて美雪を水樹から引き剥がした。

その行動に、美雪も水樹も驚き目を丸くする。

「羽莉…？」

「…や、やだなあ美雪…そんな風に言ったら名城君勘違いしちゃうじゃん。」

羽莉はへラツと笑って顔を上げる。

「だ、だって羽莉…っ！」

「嫌がらせなんてされてないよ。ちょっと悪口言われただけじゃない。気にしない気にしない！」

「羽莉…！？」

「……。」

羽莉のその笑顔に、なぜか不機嫌そうに眉を寄せる水樹。

「ほ、ほら、授業始まっちゃうよ！！早く教室戻ろう！」

「ちょっと…！！！」

羽莉は美雪の腕を無理矢理引いて、水樹の前から去った。

「…嫌がらせ…？」

「ちょっと羽莉！！なんで誤魔化すのよ！あいつらに言えば松村達だってなにもしてこないだろうし…！」

「あいつらの手は借りたくないの！」

美雪は羽莉の怒声にぐっと押し黙る。羽莉は一息置いて美雪の腕から手を離す。

「お願い…名城達には言わないで…。もうあいつらと関わりたくないし…お願い、美雪。」

「…分かった。けどあたしは絶対あなたの味方だから。なにかあったら絶対言いな。」

「…うん、ありがと、美雪。」

真面目な表情をする美雪に、羽莉はまた苦笑いで答えた。

あたしは絶対泣かない!!

嫌がらせがなんぼのもんじやい!!

## 第5話 襲撃

教室に入った途端、絶句した。

「な…っ!」

色とりどりのラッカーで無残に汚された、羽莉の机。カッターで刻まれた鞆。

あまりの光景に、羽莉は入り口前で立ち尽くした。

見てみぬ振りをするクラスメート達を無視し、自分の机に食いつくように寄った。

ズスタの鞆を手に取り中身を確認するが、やはりごっそりなくなっていた。

鞆を手にしたまま立ち尽くしていれば、それを見た美雪が血相を変える。

美雪は近くにいた男子の腕を掴んで言い寄った。

「誰がやったんだよコレ! あんた達見てたんでしょ!？」

「お、俺達にも関係ねえよ…。」

「そんなこと聞いてないんだよ! 誰がやった!？」

「ま、松村達…だと思っけど…。」

その男子はバツが悪そうに視線を逸らした。

「あいつらっ… ちょっとあたし行ってくる!」

「っ! み、美雪!」

教室を飛び出していきそうな美雪の腕を、慌てて掴んで引きとめる。

「ちょっと羽莉! あんた正気!? ここまでされて黙ってられるわけないでしょ!？」

「マジでいいから! ! 落ち着いてっ!」

羽莉はなんとか美雪を教室へ引き戻す。

「そうやって反応したらあいつらの思うツボだよ…。」

「でも…っ」

「…お願い、あいつらにはなにも言わないで? 大丈夫だから。」

羽莉は苦笑いしながら手を合わせた。

「羽莉…。」

「机取り替えてくるね!」

「あ、あたしも行くよ…っ」

「大丈夫だよ。もう授業始まるし、先生に遅れていきますって伝えておいて。」

羽莉は美雪に笑顔を見せて、鞆を脇に挟み、机を持ち上げる。

「じゃあ、行ってくるね。」

「う、うん…。」

羽莉が教室を出て行ったのと同時に、授業開始のチャイムが鳴り響いた。

「よい…しよっ、と。」

校舎裏のゴミ置き場に汚れた机を置き、息について腰を拳で叩く。

「鞆はどうしよっかなあ…。」

(てか、親にはどう説明しよう。)  
手にした鞆を見つめて溜め息をつく。

すると。

バツシャアアッ

「…え…?」

いきなり頭上から降りかかってきた冷たい水。

濡れて肌に張り付いた制服に、髪的先から滴り落ちる雫。

「な、に…?」

「いえーい命中ー!」

その声に羽莉は顔を上げる。

二階の窓から絵実が率いる女子達がバケツを手に顔を出していた。

「ねー見てみてー、なんか水被ってるブスがいるー!」

「ねえ、そっいえばそれ雑巾絞った水じゃなかったあ?」

「キヤハハツ、そうだっけ？まあいいんじゃない？汚い顔が綺麗になつて。」

女子達の耳障りな甲高い声も、呆然とした羽莉の耳をすり抜けていく。

すると、女子達の後ろから割って入ってきた絵実が姿を現した。

「そんな汚い格好じゃ、陵夜様と水樹様の前に出れないね？しばらくそこでおとなしくしてな！」

「じゃあね。」

絵実達は授業中な事にも関わらず、大声で笑いながら去っていった。再びしんとしたその場所に羽莉だけが残される。羽莉は濡れた髪の毛を手で梳いて溜め息をついた。

『学校来れなくしてやるからな！』

(さすがにコレは予想外だったな。。。)

「くさ…ジャージに着替えなきゃな…」

肌張り付いた衣服を指で摘み、また溜め息をついた。

そして、じわりとこみ上げてきた涙を慌てて堪える。

泣くな…泣いたらあいつらの思うツボじゃないか…。

ぐいっと指で額に張り付いた前髪を払って、ズタズタの鞆を机に叩き付けた。

「あつれー？羽莉ちゃん！？そんなとこでなにしてんのー？」

「っ！」

その声にギクリと肩が揺れる。声の方に振り向けば、授業中な事にも関わらず堂々とサボっている陵夜と水樹が渡り廊下に立っていた。羽莉は慌てて汚れた机を背に隠す。

「そ、そっちこそなにしてんの？」

「俺らはいつもの場所でサボり！あれ、まさか羽莉ちゃんもサボり！？」

「ち、違うよ！っ、机壊れちゃってさ、先生が取り替えるから捨て

てこいつて。」

「マジか！大変だね。」

「あ、あはは……。」

「……なんで濡れてるの？」

能気な陵夜とは反対に痛いところをついてきた水樹に、ギクリと肩が揺れ目元が痙攣する。

「え、えつとつ……そ、掃除のおばさんに間違えて水かけられちゃつてさ、災難だよね〜本当！」

「本当に？」

うまく誤魔化したと思ったが、聞き返されて更に焦る。

「本当だつて！」

「……ふうん。」

納得がいかないというような表情の水樹だが、なんとか誤魔化せたいと思っホツと息をつく。

そして陵夜達から落書きが見えないように後ろ手で机を少しずつずらしていく。

「ほ、ほらもう行きなよ！先生に見つかっちゃうよ？」

「ああ、そうだね。じゃ、またね羽莉ちゃん。」

「ま、またねじゃないつての。」

「あははっ。」

「……。」

陵夜は笑顔で、水樹は眉を寄せてその場から去っていった。

陵夜達の姿が見えなくなつてから、ふうと羽莉は溜め息をつく。

（よかつた、なんとかバレなくて……。）

「っ……は、くしゅんっ！」

くしゃみをして、羽莉は鼻を睨つた。

「ちつくしよ〜……早く着替えよ……。」

羽莉は服の端を絞りながら教室へ戻つた。

「あ、もしもし、久しぶり。」

『お、絵実じゃん。どした？』

「最近暇だよな？あいつらも暇してるっていつし。」

『ああ、それがどうかしたか？』

「…可愛がってほしい女がいるんだけど、お願い聞いてくれる？」

## 第6話 王子様？

「はっ、くしゅん！」

「ちよつと大丈夫？」

「うん……。」

ティッシュで鼻をかみ、机に突つ伏す。

昨日絵実達に水をかけられてから、くしゃみがとまらないのだ。咳も出てきてるし、朝からなんだか熱っぽい。

「午後これから体育あるけど、大丈夫か？保健室行くか見学した方が……。」

「いや、大丈夫だよ、大して具合悪くないし……。」

「なに言ってるんのよ、顔色悪いって。本当無理しないほうが……。」

「もう〜美雪は心配性だなあ。」

そう笑顔で返すも、正直体調はそんなに優れていなかった。

（なんか頭痛いかも……。）

だが絵実達のこともあるし、美雪にこれ以上心配はかけたくなかったのだ。

今は絵実達の姿は教室にはないし、今日は特になにもされてない。

（今日はもう何事もないといいけどなあ……。）

なんて、重たい瞼を閉じながらそんな事を考える。

そこで、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

貴重な休憩時間も呆気なく終わってしまった。

「う〜…体育マラソンかあ……。」

「ねえ、ほ、本当大丈夫？」

「だあから大丈夫……。」

羽莉の優れない顔色を見て美雪は本当に心配になる。それにも構わず、羽莉はふらりと席から立ち上がる。

「ほら、遅れちゃうから早く更衣室行こう？」

「う、うん……。」

心配そうな美雪と一緒にジャージを手に教室を出る。

「あ！羽ー莉ちゃんっ！」

「あ……。」

廊下で女子達と溜まっていた陵夜と水樹とすれ違う。

溜まっていたというよりも、水樹だけは不機嫌そうな表情をしていたけれど。

「体育？いいね〜女子のジャージ姿っ。」

「うっさいな……。」

「……三園？」

陵夜の発言に眉を寄せた羽莉に、急に水樹が女子達の群れを掻き分けて近づいてきた。

「……？なによ？」

「……顔色悪い……。」

背の高い水樹が屈んで羽莉の顔を覗き込む。

(う、わ……)

綺麗な顔が急に間近に迫ってきて、思わず顔を赤く染め後ずさる。

そして、骨っぽい大きな手が羽莉の額に触れびくりと肩を揺らした。

「……お前……。」

「っ……！き、気安く触らないでよ変態！」

ハツとなり水樹の手を慌てて振り払う。

「い、言っておくけど、あのことまだ許してないんだからね……！」

「……。」

「行こ美雪！」

「う、うん……。」

羽莉はきよとんとした顔をした水樹の横をすり抜けていった。美雪もその後をついていく。

「なにあの女！水樹様にあの口の利き方！」

「調子のつてんじゃないの！？陵夜様、もう関わるのやめたら？」

「いや、あの子本当面白いんだよ。なあ水樹。」

「……。」

(あのこと……ああ、パンツのことか。)

「聞ってる？水樹。」

「まだ根にもってんのかよ……。」

「あ？」

「いや、なんでもない。」

水樹は一人呟いて、羽莉の額に触れた右手を見つめた。

『気安く触らないでよ！』

「……熱い……？」

(うつおわくなにこれ気持ち悪っ……！)

グラウンドをヨタヨタ走りながら、こみ上げてくる吐き気を必死に堪える。

運動神経のいい美雪はもう先頭を走っていて、羽莉はいつの間にか一番後ろを走っていた。

次の人がもう大分前にいる。それすらも定められないくらいに視界はグラついていた。

(うつ……もうリタイアしちゃおっかなあ……。)

口を手で押さえながらそれでもなんとか足を進めた。

「ん〜いい天気だな〜水樹っ。」

「そうだね。」

屋上で授業をサボっていた二人。陵夜は寝そべりながら気持ち良さそうに伸びをしている。

水樹はフェンスに寄りかかり小説を読んでいた。

「なあ〜、本ばっか読んでねえで遊ぼうぜ？」

「たとえば？」

「……。」

「思いつかないなら言っな。」

「うつ……。」

クールに突っ返されてしまった陵夜は、諦めて押し黙ってしまった。

水樹は次のページを捲ったところで、ふとグラウンドに目をやった。一年の女子が体育でマラソンをやっていた。

(…そういや…あの女体育だったな。)

羽莉の顔が浮かんできた。

そして、同時にあの熱い額も思い出す。

羽莉の姿を思わず探してみる。

「……………あ。」

(いた…。)

どこにいるのかと思えば、一番後ろを一人だけで走っていた。他の女子とは大分距離を離している。

あまり運動が得意に見えないが、様子がおかしかった。

足取りはふらふらでおぼつかない。もう今にも倒れそうではないか。

「あいつ…っ」

そして、遂に足がぐくりと崩れたかと思うと、そのまま倒れてしまった。

「っ……………!!」

ガシャンとフェンスに飛びつく。倒れた羽莉に教師や他の生徒が駆け寄っていく。

「んー？どうしたー？」

水樹は陵夜の問いに答える前に、持っていた本も投げ出して屋上を飛び出していった。

「み、水樹!？」

(やばい…なんか地面ぐにやぐにやしてる…?)

もう半周近く他の生徒と差が出来ていた。

走るというより、ただふらふらと歩みを進めているだけ。

グラグラと揺れる視界の中、足がもつれてそのまま倒れてしまった。

「っツ……………!!」

(あ…どうしよう…。)

立ち上がるうにも、体に力が入らなかった。

(頭……痛い……)

重たい瞼に勝てず、そのまま意識を手放してしまった。

「三園さん！」

「羽莉！？」

倒れた羽莉に気づいた先生や美雪達が、慌てて駆け寄ってきた。

「羽莉！？羽莉い！！」

美雪が声をかけるが、羽莉の答えはない。

顔は真っ赤で、大量の汗。苦しそうに呼吸を繰り返している。

「先生！早く保健室運ばなきゃ！」

「そ、そうね！だ、誰か男の先生……っ」

先生が他の先生を呼びに行こうと立ち上がる。

すると、女子達の群れの中から風を切って現れた男。

慌てる先生の横をすり抜け、すぐさま羽莉を抱きかかえたのは、

「な、名城君……？」

呼吸の乱れた水樹だった。

似合わない汗をかいて、苦しそうな羽莉の体を軽々と抱き上げて。

「み、水樹様どうして……！？」

「保健室連れて行く。」

「へっ、あ、はい……。」

先生にそれだけと告げて、羽莉を抱えた水樹は再び校舎に駆け行って行った。

「か、かつこいいい〜水樹様！」

「名城……なんで……。」

キヤーキヤー騒ぐ女子達の中、美雪は呆然と呟いた。

それを見ていた絵実達は、殺気立った様子でギリツと歯を食いしばった。

なんだか幸せな夢を見た。

あたしの王子様が、

迎えにきてくれる夢。

## 第7話 困惑

ふわふわするー…。

あたし…どうしたんだっけ…？

確か体育で…マラソンで頭痛くてぐにゃぐにゃって…。

…ああ、そうだ。

王子様が助けにきてくれて…あたしを抱きかかえてくれて…。

あたし…お姫様みたいだったなあ…。

「…むにゃ…？」

ふっと意識が覚醒し、重たい瞼を持ち上げる。

何回か瞬きを繰り返しているうちに、そこが保健室だと分かった。

額には濡れたタオルが乗っかっていて、ひんやりとして気持ちよかった。

(…あつつい…。)

あまりの暑さに布団を蹴り飛ばそうと足を振り上げれば、

「うわ、びっくりした。」

…え？

その声に羽莉は頭を少し持ち上げて、ベッド脇を確認してみる。

「具合大丈夫？」

「…へ…っ？」

ベッド脇には、本を手にした水樹が座っていた。

あまりの驚きに羽莉は目を丸くし、ずり落ちたタオルにも気づかず硬直する。

「寝相、悪いんだね。」

「〜っ…！！ち、ちがつ、暑かったから…っ！つか、なんであんたが…！！？」

「うん？保健室でサボろうと思って来たら、先生が用事あるから代わりにもててくれって頼まれた。だからみてた。」

「だ、だからみてたって…！！ふ、普通守らないだろ！」

（ていうか寝顔見られたアアツ…／＼！！）

あまりの恥ずかしさに、ガバツと布団を頭まで被る。

「…あ、涎とか寝言とか歯軋りとか…そんなもの、見てもいないし聞いてもないから安心して。」

（見てんじゃんかよ！！）

更に恥ずかしくなるようなことを言われ、羽莉はもう顔を出すことすらさえ出来なくなる。

なんでよりによってこいつなんか…！！夢の中の王子様はどうしたの！？最悪！！

「熱、あるんだって？」

「へ…？」

その言葉に羽莉はそつと体を起こし顔を覗かせる。

すると、ふと視界が真っ暗になる。汗ばんだ額に触れた、大きな手。

「熱いね、まだ。」

「〜っ…！！」

そう言つて大きな手が離れた。綺麗な顔がすぐ目の前にある。

「吐き気とか、ある？」

「……………」

「…なあ、聞いてんの？」

「近いんだよバカああ！！！！」

スパアンツ

「……………」

「はっ…!!」

気づいた時には既に水樹に強烈なビンタを食らわしていた。

水樹は殴られた方の頬を無表情でさすっている。

たらたらと冷や汗がこみ上げてくる。

(ま、またやつちまったアアア!!!)

「…また殴られた…。」

「い、いや、あのそのっ…!!」

「俺今なにかした…?」

「ご、ごめんなさいごめんなさい!い、今は条件反射っていうか

っ…体が勝手に動いたっていうか…!」

「…ぶはっ…っ」

……はい?

手を合わせて必死で頭を下げていれば、頭上から吹き出す声が聞こえる。

恐る恐る顔を上げれば、水樹が体を折り曲げてぶるぶる震えている。

「ぶっくっくっくっ…!!」

「いやあの…名城君…?」

「あんたっ…本っ当おもしれえッ…!」

本気で笑っているらしく、ばんばんとベッドを叩きながら腹を抱えている。

羽莉は恥ずかしくなって顔を赤く染める。

「な、なんなの…っ!?!」

「あ…こんなに笑わせてくれる女あんたぐらいだよ…っ」

「っ……。」

無邪気な笑顔に、不覚にもドキリとってしまった。

普段あんなにも無表情で、あんなにも不機嫌そうで。

人を寄せ付けにくい彼が、綺麗な顔を歪めて笑っている。

(…結構可愛い顔して笑えんじゃん…。)

赤い顔をふいっと背けてそんなことを思う。

水樹はやっと笑いが治まってきたのか、息を大きく吐き出した。

「あー面白い。俺本当あんたの事気に入ったみたい。」

「…あんた達に気に入られても嬉しくない…。」  
なんて悪態をつくが、眩しい水樹の笑顔を見直視出来ないための強がりだった。

「熱、測つときなよ。」

「…どうも…。」

水樹に枕元に置いてあった体温計を渡され、おずおずと受け取る。表情は、羽莉という時だけなんだか柔らかくなっていているような気がして、羽莉はなんだか変な感じだった。

そして、6限目の終わりを告げるチャイムが校内に鳴り響く。

「あ、終わった。じゃあ戻ろうかな。」

水樹はベッドに置いていた本を手にとつて、椅子から立ち上がった。なんだか名残惜しいような気分の羽莉は、慌ててそんな思考の自分を心の中で叱咤する。

「…あ、そうだ。」

「…?」

ベッドを囲っていたカーテンを開いて出て行こうとしていた水樹が、そう言つて足を止めて振り返る。

「なによ?」

「…昨日の、あれ、本当に掃除のおばさんにやられたんだよね?」  
心臓が一回大きく跳ねた。水樹の意味ありげなその言い方に、羽莉は思わず動揺して俯いて目を泳がす。

「…三園?俺だけには本当の事言つたら?別に陵にも言わないしどうにもしないよ。」

「…だから、言ったでしょ?」

羽莉は咄嗟に笑顔を作り、顔を上げた。

「おばさんにかけられたの。本当に。」

「…本当に?」

「あなたにどうしてそんなつまらない嘘つかなきゃいけないの?」

「……。」

「気にしすぎだつて！ね？」

またヘラツと笑ってみせる。水樹はしばらく黙った後、また不機嫌そうに眉を寄せた。

「そう…。」

「うん。」

「…じゃあ、またね。」

水樹は素っ気なく告げカーテンを閉めた。そして、保健室から出て行く音がした。

「…さつきまであんなに笑ってたのにあの顔…。」

(…それにしても、なんであんなにしつこく聞いてくるんだろ…。)

羽莉は再び布団の中に潜り込む。

白い天井を見つめ溜め息をついた。

(それにしてもよかった…今日は特に松村さんになにもされないで…。)

ガラツ

「三園さん？いる？」

「羽莉ー？」

保健室の戸が開く音と、保健医の女の先生と美雪の声が聞こえた。

「あ、はい、います。」

体を起こして返事をする。ベッド周りのカーテンが開き、先生と美雪が顔を出した。

「あら、さつきよりは楽そうね？」

「あ、はい、なんとか…。」

「熱は測った？」

「あ、まだです…。」

「じゃあ、測ったら呼んでね？」

「はい。」

先生は自分の席に戻っていった。代わりに美雪がベッド脇に移る。

「大丈夫？」

「うん、なんとかね。」

羽莉は体温計を脇に挟んで美雪に笑顔を見せる。

「本当びっくりしたんだからね？だから休めって言ったのにこの馬鹿。」

「ご、ごめんなさい…。」

「ま、しばらくは学校休む理由出来てよかったじゃない。これで松村達と顔合わせなくて済むし。」

「うん、そうだね…。」

「鞆、取ってきたからね。」

「ありがとう、美雪。」

「…しつかしさあ、」

美雪はベッド脇に鞆をおろし、水樹が座っていた椅子に座る。

「名城にもびっくりしたよ。」

「…名城水樹？」

「そうそう。授業中なのにさ、倒れた羽莉を走って助けにきたんだよ。」

「…はい？」

「羽莉をお姫様抱っこして保健室まで走って連れて行ったの。もう周りの女子キヤーキヤー騒いで。女嫌いの水樹様がどうしてーって。」

「…なんで…。」

『保健室でサボろうと思って来たら、先生が用事あるから代わりにみててくれって頼まれた。』

なんでそんな嘘ついたので…？

心臓の音が早くなってくる。

「…羽莉？どうした？」

「へ…？」

「顔、真っ赤。」

なんで。

美雪の言葉に羽莉はガバツと腕で顔を覆い隠す。

なんで顔こんな熱いの…っ／＼

「…羽莉？」

不思議そうな美雪の言葉も耳に入らず、羽莉はただ自分の感情に困惑していた。

「俺本当あなたの事気に入ったみたい。」

大嫌いだったはずなのに。

あの無表情な人のあの可愛い笑顔が、

しばらく頭から離れてくれなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7179d/>

---

困われ姫

2010年10月11日04時57分発行